

「書かないこと」を書くカフカの三長編断片における詩学的戦

下園, りさ

<https://hdl.handle.net/2324/1543914>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

「私は文学からできている」と断言するフランツ・カフカ（1883-1924）において、「書くこと」は再帰動詞的な行為である。自身の創作を一般的な動詞である「詩作する」ではなく「書くこと」と常に呼び表したカフカにとって、「書くこと」は「生きること」であり、「生きること」は「書くこと」だった。彼は書くという行為と内容との一致を目指し、その志向は「私は書く」という一文に行き着く。特に日記や手紙はこの一文の変奏から成り立つ。カフカは書く主体かつ客体としての「私」と「書く」という行為を繰り返し書く。だが、「私は書く」と書かれた文章の「私」と、文章の書き手としての「私」の間には、埋めることのできない溝がある。自己と書かれた自己との間に入り込み、その一体化を妨げるのが、他でもない「書くこと」なのだ。それゆえに、カフカの「書くこと」とは、「書くこと」そのものをめぐって繰り返し広げられる書くことである。

一体化を妨げるものとしての「書くこと」は、しばしば他者に対する支配の手段として作品に描かれる。中でも「書くこと」の権力的なあり方を前面に押し出したのが、本論で扱う長編断片『失踪者』（1912-14）、『訴訟』（1914-15）、『城』（1922）の三作品である。カフカが生涯にわたって続けた長編執筆の試みは、三つの長編断片を残すことになった。これらの長編断片に共通するのが、「書く」支配組織対「書かない」主人公という対立構造である。カフカのイニシャルを共通して持つ主人公たちは、皆よそ者として登場し、未知の社会へと足を踏み入れる。官僚組織として描かれる『訴訟』の裁判所や『城』の役所だけでなく、『失踪者』の舞台であるアメリカにおいても、「書くこと」は主人公たちを管理し、支配する手段にほかならない。長編断片では「書く」支配組織と「書くこと」が同一視されて書かれるがゆえに、「書くこと」そのものが権力的な行為となる。他方の主人公たちはいずれも書かない。彼らは書くべき手紙や書類を書かない、もしくは書けないのだ。時として作家カフカの分身と見なされる主人公たちが、書き手のカフカとは逆に「書かない」者として描かれていることは、見逃してはならない事実である。長編小説において、「書くこと」を書くというカフカの行為は、「書くこと」に対する彼自身の態度とは裏腹に、「書かない」ことを書くものになっている。

本論は長編断片における「書くこと」をめぐる対立構造に着目し、「書くこと」を書くカフカの「書くこと」が、「書くこと」と同時に「書かない」ことを書くこと、そしてそれが権力的なものとしての「書くこと」に対するカフカの詩学的な戦略であることを明らかにする。本論第一章では、自己証明の問題と「書くこと」との関係を取り上げ、自己証明の困難さが「書くこと」からの疎外として描かれているという観点から『失踪者』を扱う。次いで第二章では『訴訟』を主たる考察対象とし、作品中で自伝執筆が持つ意味とその挫折の理由に焦点を当てることで、自分自身を書くという行為の問題を検討する。そして第三章では、『城』に描かれる通信手段のあり方と様々な人物による模倣を手掛かりに、城への道を探す主人公の試みが、「書くこと」を通じて村を支配する城の統治の正当性に疑問を投げかける役割を果たしていることを明らかにしたい。

カフカの言語観、文学観を記した数少ない文章であるイディッシュ語についての紹介講

演とマイナー文学のテーゼにおいて示されているのは、権威・権力から自由な言語であり文学である。言語危機という時代の問題と密接に絡み合いながらも、カフカの問題意識は言語一般ではなく「書くこと」とその権力性へと向かう。カフカの「書くこと」とは、「書くこと」に対する絶え間ない否定の試みであり、「書くこと」が必然的に抱える権力性をいかにして「書くこと」において否定するかという試みからなっている。その試みの一つが「書くこと」を書くことであり、そこにおいて書かれている内容が示すのは、書かれている文章そのものであり、他の何ものをも意味しない。再帰動詞的な「書くこと」とは、「書くこと」を無意味化させる行為にほかならない。「書くこと」から意味を抜き取ることによって、カフカの「書くこと」は他者を支配する権威的・権力的な「書くこと」とは一線を画することになる。このような「書くこと」に対する戦略は、長編断片において「書かない」主人公として現われる。権力から自由な「書くこと」を産み出すために、カフカは権力的な「書くこと」のありようを書き、同時にそれを打ち消す主人公を書いた。長編断片の執筆とは、権威化されてしまった「書くこと」に対して、自由な「書くこと」を得るためのカフカ自身の試みである。カフカの「書くこと」は、「書くこと」の内部から「書くこと」を否定する。それが権威と化した文学に対するカフカの試みであり、彼の文学は文学でありながら文学でない「書くこと」として、文学全体に揺さぶりをかけようとする。

(1913)